

川上宏奨学金受給研究成果報告書

研究題目：能登半島と都市を結ぶ——空港開港による地域の変化

1. 研究目的

2003年7月7日、石川県2番目の空港である能登空港（のと里山空港）が開港した。能登地域は、同じ石川県の金沢のような若者でにぎわう観光地ではなく、人口の減少が進行している地域であるのに、どのような必要性を見出され、石川県内2つ目の空港として設立されたのだろうか。また、開港後は羽田便を1日2往復という極めて少ない運行本数であるが、能登空港は地域活性化にどのように貢献しているのだろうか。

また行政機関が主導で行われる取り組みにより、空港や道の駅といったハード面が整ったとしても、それだけで能登地域は活性化されたといえるのだろうか。人材や人々の意識といった無形の要素であるソフト面を整えていくことが必要なのではないか。

これらの問いを掲げ、文献調査とインタビュー調査を実施した。

2. 研究方法

本研究でおこなった調査は、文献調査とインタビュー調査である。能登地域でのフィールドワークを予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大によりかなわなかった。

まず、能登空港の開港に至った経緯や開港後の状況を明らかにするために新聞報道を中心とした文献調査をおこなった。次に能登地域の実態を十分に把握するために、行政機関へインタビュー調査をおこなった。インタビュー調査でたびたび出てきた「関係人口」という言葉を軸に、再度文献調査とインタビュー調査をおこなった。

3. 研究結果・考察

まず能登空港の開港に至った経緯について、能登半島にとって交通手段の整備が、地域の発展にとって大きな役割を果たすことが期待されていたことがわかり、その手段のひとつが能登空港の開港であったことが明らかになった。開港後について、能登空港の利用者や搭乗率は、東日本大震災や新型コロナウイルスの影響を除いて、おおむね増加現象が見られた。能登空港が開港したことによって首都圏とのアクセスが向上し、地域活性化に影響を及ぼ

した事例として、「婚活ツアー」・「移住」・「食ツアー」・「朝ドラまれ」の4つを挙げた。以上の4つの例のように、能登空港が開港したことによって首都圏とのアクセスが向上し、能登地域に訪れるきっかけとなり、地域活性化に影響を及ぼしたと考えた。

次に能登地域の行政機関へのインタビュー調査の結果、能登空港が開港したことにより、地域の人々は能登空港を地域の交流拠点として機能していることがわかった。そのなかでも、子ども向けのイベントや助成制度、航空学園の誘致や国内留学の実施など、能登の将来を担う若者に着目していることが特徴的であった。

「関係人口」という言葉を軸に、再度文献調査とインタビュー調査をおこない、空港といったハード面を起点にしつつ、関係人口を軸に、能登の知られていない魅力を伝えるため、関係人口や人材、人々の意識といった、ソフト面を整えていくことが重要であると考えた。

4. 奨学金の主な用途

受給した奨学金は、主に文献費や資料のコピー代、インタビュー調査の際に調査に協力していただいた方々への謝礼品代として用いた。

5. 謝辞

本研究をおこなうにあたり奨学金を給付してくださった故川上宏先生とご家族、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。奨学金をいただけたことで、調査にかかる費用を案じることなく調査に励むことができました。本当にありがとうございました。